牛で認められた免疫介在性筋炎

〇神谷可菜　齋藤麻矢　竹田祥子　清水俊一
早来食肉衛生検査所

【はじめに】動物における免疫介在性筋炎は、犬、猫、馬で報告があり、咀嚼筋炎、多発性筋炎、その他の筋炎（眼球筋、舌筋）に分類される。咀嚼筋炎では、肉食動物および霊長類の咀嚼筋は２Ｍ筋線維と呼ばれる他の骨格筋とは異なる筋線維を持つことが知られ、２Ｍ筋線維に特異的な自己抗体が産生されることによって発症することが知られている。また多発性筋炎は、犬では腸炎・甲状腺炎・胸腺腫などの腫瘍随伴症候群に伴い、猫では猫免疫不全ウイルス感染に伴い、馬では連鎖球菌に対する抗体の交差反応として発症することが知られている。一方で、牛においては免疫介在性筋炎の報告がなく、原因おろか罹患するか否かも不明である。今回、免疫介在性筋炎を疑う牛の症例に遭遇したため、さらなる精密検査を行うこととした。

【症例および所見、診断】

症例：交雑種、去勢、11ヶ月齢、起立不能となり病畜として搬入された。

肉眼検査所見：左右内転筋，腹直筋，腹横筋において筋線維に沿った縞状の白色病巣が認められ，病変は充実性であった．その他に深鼠径リンパ節が腫脹していたが，それ以外の骨格筋及び臓器に異常は認められなかった。

遺伝子検査所見：内転筋，深鼠径リンパ節を材料としたPCRで，牛白血病ウイルス遺伝子は陰性であった．

組織検査所見：筋線維周囲の筋内膜を主座としたリンパ球浸潤が認められた．リンパ球は筋線維を取り囲み，筋線維内にリンパ球が食い込む「くりぬき像」が認められた。リンパ球の浸潤は血管及び筋周膜では乏しく，病巣は筋束単位に形成されていた。また，進行した病巣ではマクロファージならびに形質細胞の浸潤や，軽度の結合組織の増生が認められた。免疫染色では，筋周膜及び筋線維内に浸潤したリンパ球の大半はCD３陽性を示し，細胞質にGranzymeB陽性顆粒が認められた。また、深鼠径リンパ節においてもＴ細胞の顕著な浸潤・増生が認められた。

診断名：内転筋の筋内膜を主座とする非化膿性筋炎

疾病名：牛の免疫介在性筋炎を疑う